

首都圏で人気の「北海道物産展」新宿3デパート同時開催の舞台裏

昭和42年1月26日第3種郵便物認可 第44巻第10号 平成21年10月1日発行 発行所 株式会社太陽 札幌市中央区大通西28丁目

道民雑誌

10
2009

クワダ

8・30総選挙 民主圧勝、自民惨敗 **いつ持つか民主党、甦るか自民党**

セントラルリーシングに新たな野望!? **新千歳IC用地を巡る欲と利権のストーリー**

鳩山由紀夫首相誕生でどうなる新幹線? 「北海道はリニアでどうだ!」

北海道信用金庫協会・北村信人^{会長}に問う「合併・再編」「未来像」



≡ 医療最前線

アトピー性皮膚炎、気管支喘息、アレルギー性鼻炎など専門医が語る

3大アレルギー疾患の臨床研究

300

515



〈ふくだ さとし〉
1951年生まれ57歳。北海道大学医学部卒。85年米国カリフォルニア大学サンディエゴ校留学。96年北大医学部耳鼻咽喉科助教授。01年7月より現職。07年4月より北大病院副院長。日本耳鼻咽喉科学会常任理事、日本学術会議連携会員。

北海道大学大学院医学研究科
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野

福田 諭 教授



〈おおさき よしのぶ〉
1954年生まれ54歳。旭川医科大学医学部卒。84年国立療養所道北病院勤務。90年米国立癌研究所研究員。86～90年、93～97年旭医大第一内科助手。97年より現職。05年1月旭医大呼吸器内科科長。今年5月から現職。日本肺病学会評議員、日本呼吸器学会評議員。

旭川医科大学 呼吸器センター

大崎 能伸 教授

外科学分野では、シラカンバ花粉症について資源適合仮説に基づく翌年の花粉飛散予測を実施し、良好な結果を報告している。

●各大学の研究

北大耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野では、シラカンバ花粉症について資源適合仮説に基づく翌年の花粉飛散予測を実施し、良好な結果を報告している。

舌下減感作療法に注目

臨床の成績に応じて、科学的なエビデンス（EBM）

「花粉飛散量を前もって知ること、季節前に投与して発症を予防、また症状を抑えることもできる。現代医療の大きな流れは高度先進医療と予防にあり、この仮説は予防の面で貢献できる」と福田諭教授は語る。

「花粉飛散量を前もって知ること、季節前に投与して発症を予防、また症状を抑えることもできる。現代医療の大きな流れは高度先進医療と予防にあり、この仮説は予防の面で貢献できる」と福田諭教授は語る。

増加し、肥満細胞においてアレルギー反応を増悪させていることも突きとめており、アレルギー疾患の予防に向けた基礎研究も進んでいる。

「重症の患者さんの場合には、一般的な治療では効かないケースも少なくない。臨床の成績に応じて、科学的なエビデンス（EBM）

「患者さんの訴える症状と医師が診ている症状のギャップを診ることができれば、より実態に即した治療ができる」（大崎教授）

同分野の中丸裕爾講師は、千葉大学と共同でハウスダストエキスをを用いた舌下免疫療法の有効性と安全性を検討する臨床研究を06年10月から行っており、より正確なデータを採取するため、偽薬と真薬を用いる「二重盲検試験」を実施。6ヵ月までは両群ともに明らかに変化を認めなかったが、鼻

さらに、酸化ストレスによりSIRT1（サーチュイン・ワン）が減少することとIL-4遺伝子発現が増加し、肥満細胞においてアレルギー反応を増悪させていることも突きとめており、アレルギー疾患の予防に向けた基礎研究も進んでいる。

「重症の患者さんの場合には、一般的な治療では効かないケースも少なくない。臨床の成績に応じて、科学的なエビデンス（EBM）

「患者さんの訴える症状と医師が診ている症状のギャップを診ることができれば、より実態に即した治療ができる」（大崎教授）

これは抗原液を注射する代わりにエキスを舌下に載せることによって抵抗性を高める免疫療法で、自宅での治療が可能となり、現在のところ副作用もほとんど報告されていない。

また、アレルギー性鼻炎予防を目的に「ヒストン脱アセチル化酵素（HDA C）の働き」に着目。酸化ストレスがアレルギー反応を増悪させるとされているが、同大学が研究した結果、酸化ストレスにHDA Cが関与することがわかった。

は重症の患者が多いため、これらの薬剤を常用使用しても良くならない場合があるという。

「患者さんの訴える症状と医師が診ている症状のギャップを診ることができれば、より実態に即した治療ができる」（大崎教授）

また、アレルギー性鼻炎予防を目的に「ヒストン脱アセチル化酵素（HDA C）の働き」に着目。酸化ストレスがアレルギー反応を増悪させるとされているが、同大学が研究した結果、酸化ストレスにHDA Cが関与することがわかった。

また、アレルギー性鼻炎予防を目的に「ヒストン脱アセチル化酵素（HDA C）の働き」に着目。酸化ストレスがアレルギー反応を増悪させるとされているが、同大学が研究した結果、酸化ストレスにHDA Cが関与することがわかった。



〈はらぶち やすあき〉
1956年生まれ52歳。旭川医科大学医学部卒。89年7月札幌鉄道病院耳鼻咽喉科医長、91年12月ニューヨーク州立大学バッファロー校医学部小児科学講座Research Instructor。93年7月札幌医科大学耳鼻咽喉科学講座講師、98年11月より現職。日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会理事等。

旭川医科大学医学部
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座
原 洌 保 明 教授



〈ひみ てつお〉
1953年生まれ55歳。札幌医科大学医学部卒。86年米国ベイヤー医科大学留学、96年札幌医科大学耳鼻咽喉科学講座助教授、99年7月より現職。日本鼻科学会理事。

札幌医科大学医学部
耳鼻咽喉科学講座
氷見 徹夫 教授

同大学では、アレルギー発症までを、①アトピー体質獲得、②アレルゲンに対する感作成立、③感作成立からアレルギー発症まで、④アレルギー発症に伴う症状発現の4つのステップに分け、それぞれの検討を行っている。そしてステ

ツプ②については、鼻粘膜上皮での「抗原のサンプリング」、「樹状細胞とのクロストーク」の解析と評価系への応用。ステップ③では、アレルギー発症に関与する「上皮特有のサイトカイン・TSLP」の分析と評価系の確立を行い、新しい視点からアレルギー性鼻炎の治療戦略の確立を目指す。

この研究では、上皮系細胞から主に産生されるサイトカインが誘導された樹状細胞という抗原提示細胞に変化を起こし、アレルギー炎症の「スイッチ」を入れることがわかり、現在はこのサイトカイン産生を制御する物質を調べている。さらに、核内ホルモン受容体であるPPARガンマなどのメカニズムについて研究している。

また白崎英明准教授が中心となって、鼻づまりを引き起こす脂質メディエーター受容体の研究も継続して行っている。粘膜の血管内皮と脂質メディエーターとの関連から、鼻づまりのメカニズムを一部明らかにしている。

知的クラスター創成事業の研究テーマ「アレルギー・炎症反応評価による機能性食品素材開発」の研究グループに参画。鼻粘膜に付着して感染するウイルスとア

レルギー発症との関連について、これまでよりも詳細な研究を進め、幾つかの成果が出始めている。

さまざまなたいプの患者にペプチドワクチン療法を適用させるには、多数のHLA（白血球の型）と結合するペプチドが有用だが、同大学では、数多くのHLAに適合し、アレルギー反応を抑える制御性T細胞を活性化させるペプチドを発見した。

さらに同大学では、急性中耳炎の起因菌の一つであるインフルエンザ菌に対するペプチドワクチンの開発を目的として、インフルエンザ菌であるP6蛋白に着目。この研究でも数多くのHLAに結合するペプチドの候補を見つけ、研究成果を今年5月に韓国のソウルで開催された「国際中耳炎シンポジウム」で発表した。

シラカンバ花粉症の治療については、これまで「脱感作療法」や「舌下免疫療法」が一般的だったが、「ペプチドワクチン療法では、アナフィラキシー反応

さらに、来年7月7日から3日間、旭川市内のホテルで「国際扁桃上気道粘膜免疫シンポジウム」を原洌教授の主宰で開き、世界中の研究者が集まる予定である。シンポジウムでは、感染症に対するワクチン療法をトピックの一つとして取り上げ、ディスカッションする予定だ。

さらには、急性中耳炎の起因菌の一つであるインフルエンザ菌に対するペプチドワクチンの開発を目的として、インフルエンザ菌であるP6蛋白に着目。この研究でも数多くのHLAに結合するペプチドの候補を見つけ、研究成果を今年5月に韓国のソウルで開催された「国際中耳炎シンポジウム」で発表した。

さらには、急性中耳炎の起因菌の一つであるインフルエンザ菌に対するペプチドワクチンの開発を目的として、インフルエンザ菌であるP6蛋白に着目。この研究でも数多くのHLAに結合するペプチドの候補を見つけ、研究成果を今年5月に韓国のソウルで開催された「国際中耳炎シンポジウム」で発表した。

さらには、急性中耳炎の起因菌の一つであるインフルエンザ菌に対するペプチドワクチンの開発を目的として、インフルエンザ菌であるP6蛋白に着目。この研究でも数多くのHLAに結合するペプチドの候補を見つけ、研究成果を今年5月に韓国のソウルで開催された「国際中耳炎シンポジウム」で発表した。

さらには、急性中耳炎の起因菌の一つであるインフルエンザ菌に対するペプチドワクチンの開発を目的として、インフルエンザ菌であるP6蛋白に着目。この研究でも数多くのHLAに結合するペプチドの候補を見つけ、研究成果を今年5月に韓国のソウルで開催された「国際中耳炎シンポジウム」で発表した。

さらには、急性中耳炎の起因菌の一つであるインフルエンザ菌に対するペプチドワクチンの開発を目的として、インフルエンザ菌であるP6蛋白に着目。この研究でも数多くのHLAに結合するペプチドの候補を見つけ、研究成果を今年5月に韓国のソウルで開催された「国際中耳炎シンポジウム」で発表した。

さらには、急性中耳炎の起因菌の一つであるインフルエンザ菌に対するペプチドワクチンの開発を目的として、インフルエンザ菌であるP6蛋白に着目。この研究でも数多くのHLAに結合するペプチドの候補を見つけ、研究成果を今年5月に韓国のソウルで開催された「国際中耳炎シンポジウム」で発表した。